

# 強迫性障害の動物モデルである Marble-burying 行動の基礎的研究

松下 満彦<sup>1)</sup> 江頭 伸昭<sup>2)</sup> 原田 聡子<sup>2)</sup>  
奥野 良子<sup>2)</sup> 永井 宏<sup>1)</sup> 千鳥 正三<sup>1)</sup>  
三島 健一<sup>2)</sup> 岩崎 克典<sup>2)</sup> 藤原 道弘<sup>2)</sup>  
西村 良二<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 福岡大学医学部精神医学教室

<sup>2)</sup> 福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室

**要旨：**我々は強迫性障害の動物モデルである marble-burying behavior（ガラス玉覆い隠し行動）実験の特性について検討を行った。まず、ICR 系マウスと ddY 系マウスおよび DBA/2 系マウスを比較検討したところ、ICR 系マウスは最もガラス玉覆い隠し行動を起こすことが判った。次に、性差については、雌マウスの運動量が雄マウスより有意に高かったが、ガラス玉覆い隠し行動では有意差がみられなかった。また、Fluvoxamine と Paroxetine は運動量の抑制を伴うことなくガラス玉覆い隠し行動を有意に抑制したが、Milnacipran ではガラス玉覆い隠し行動を有意に抑制しなかった。これらの所見から、ガラス玉覆い隠し行動試験は特にセロトニン神経系が関与する強迫性障害モデルとして評価できることが示唆された。

**キーワード：**ガラス玉覆い隠し行動, 強迫性障害, フルボキサミン, パロキセチン, ミルナシプラン